

利根・沼田の教育

発行所 利根教育事務所
発行人 大竹 孝夫
〒 378-0031 沼田市薄根町 4412 番地
TEL 0278-23-0165 FAX 0278-23-0180
E-mail : tonekyou@pref.gunma.jp

学校教育係 授業研究会の充実

よりよい授業づくりのためには、校内研修において、授業改善を積み上げていくことが大切です。そこで、今回は、研修のつながりや積み重ねを重視した授業研究会の例を示します。

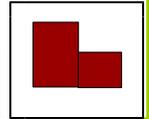
研修主題 「算数科における思考力・判断力・表現力を高めるための言語活動の工夫」

- ・前回の課題:いろいろな式を出し合えたが、交流は深まらなかった。
- ・改善策:式だけでなく考えや理由も説明させ、交流が深まるようにする。

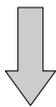


(授業者)

今回は、L字型の図形の面積を求める式と考えを説明させ、ねらいの達成に向け交流が深まるようにしたいと思います。(4年算数「面積のはかり方と表し方」)



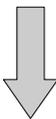
授業研究会のポイント①:協議の視点を明らかにする。



(研修主任)

今日は、『式と考えを説明させたことは、交流を深めるのに有効だったか』について協議します。〈協議の視点〉

授業研究会のポイント②:協議の視点から成果と課題を集約する。



式だけでなく考えも説明させたことで、『子どもたちは、お互いの考えがよく分かるようになった』と思います。〈成果〉



ねらいである『長方形の面積の公式を活用すると面積を簡単に求められることを見いだす』ような交流の深まりは、なかったと思います。〈課題〉

授業研究会のポイント③:課題の原因と改善策を具体的に協議し、共通理解を図る。



交流が深まらなかった原因は、『比較・検討の視点がなかった』ことだと思います。〈課題の原因〉



例えば『みんなの考えで共通していることは?』と視点を示したら、ねらいの達成に向けて、更に交流が深まったのではないのでしょうか。〈改善策〉



次回は、『比較・検討の視点を明確にした授業』について研修しましょう。〈共通理解〉

※授業改善を積み上げていくためには、特に③を充実させることが大切です。



(次回授業者)

分数と小数のまじった計算の仕方を考える次の研究授業では、『いつでも使えるのは?』という視点を示したいと思います。(5年算数「分数のたし算とひき算」)

授業研究会で明らかにした成果は、日常の実践に活用するとともに、改善策を次の授業研究につなげて評価していくPDCAサイクルを生かし、年間を通して授業改善を図りましょう。

※授業研究会で意見を出しやすくするために、ワークショップ型や色別の付箋紙に意見を書いたものをまとめていく方法などもあります。

群馬県教育委員会では地域と学校を結び繋ぐための機能として「学校支援センター」を提案して、今年度その一層の充実をお願いしております。管内の各学校においては、地域や学校の特色を生かし、実態に合った運営がなされ、小学校を中心に、学習支援、環境・安全支援、読み聞かせ等の活動が充実してきています。しかし、地域と連携協力した活動が年度や担当が替わることで引き継がれなかったり、中学校では地域と連携協力した効果的な活動を設定しにくかったりする課題もみられます。

10月7日(金)に川場村文化会館において、「地域と学校のパートナーシップ推進フォーラム」が開催されました。千葉大学教授の明石要一先生の講演と明石先生、昭和南小学校長の倉澤由之先生、前新潟市立小新中学校長の小松茂夫先生、片品村教育委員会社会教育主事の林崇夫さん、新治小学校学校支援センターコーディネーターの生方規子さん(地域住民)によるパネルディスカッションが行われました。その中から課題解決に向けて参考となる内容を紹介します。

《課題の解決に向けて その1》

持続可能な仕組みづくりを

昭和南小学校の例

【工夫】年度初めに全職員共通理解のもと地域との連携計画を見直し、連携計画に基づき「すこやかネットワーク会議」において一年間の学校支援を依頼しています。

【効果】計画的・組織的な仕組みであり、担当や職員が替わっても継続的に取り組み、年々活動が充実します。

※すこやかネットワーク会議＝学校区の婦人会、敬老会、青少年育成推進員、学校支援センターコーディネーター(地域住民)等で作る協議会組織。

新治小学校の例

【工夫】学校支援センターのスペースが確保されており、学校支援センターコーディネーター(地域住民)が配置されています。

【効果】地域との連携計画に基づく依頼はもちろん、急な支援依頼でも学校のニーズに合う支援ボランティアを見つけることができます。

管理職のリーダーシップのもと、年度や担当職員が替わっても、地域の団体や個人などに学校のサポーターとして、継続して協力依頼できる体制をつくりましょう。

《課題の解決に向けて その2》

中学校はキャリア教育の視点で

中学校では、道徳や進路指導における講話等で自己を見つめたり、主体的に進路を考えたりする等、キャリア教育を充実させるために、地域の教育力を活用していくと効果的です。学校内外での地域住民との交流により、感動したり感謝したりする体験は、中学生の豊かな心を育みます。

特に、管内全ての中学校で行われている職場体験学習の充実には地域との連携が欠かせません。その際、協議会などの組織があると地域で学校を支える気運が高まり、より一層の充実が望めます。

「〇〇中学校職場体験協議会」のような会議があるとよいです。

先進校の例

【工夫】学校や地域の実態に応じて、教育委員会担当者、事業所、商工会、PTA、区長などを委員に職場体験協議会を立ち上げています。

【効果】学校と関係者が一堂に会することで、意義や目的の共通理解が図られたり、学校の要望を直接地域の方等に伝え、協力を求めたりすることができます。また、回を重ねることにより、会議が充実するとともに、準備や事務の効率化が図られます。



今後に向けて

各学校においては、活動計画を見直したり、学校支援センターコーディネーター(地域住民)の配置や協議会組織などの体制を整備したりして、地域と学校が連携協力する活動を充実させることにより、教育効果を高め、子どもの学びを豊かなものにしていただきたいと思います。